

平安京・京都の伝統的宗教儀礼と史料データベース

京都寺院に於ける伝統的宗教儀礼の研究

本郷 真紹 毛利 憲一

Abstract: 当プロジェクトでは、平安期以前の宗教儀礼、具体的には、伝統的な神祇の祭礼と、仏教儀礼の特質を究明することを試みる。現在、研究の基礎的作業として関連する文献史料を幅広く蒐集・整理しており、その作業の過程で生じた諸問題について、まず「古代」「平安京」といった観点から「伝統的宗教儀礼」というものを捉える視角について、「王権」「首都」「伝統化」という問題性を考慮して検討を進める必要性があるということを指摘する。またデータベース化に関し、史料の分類・整理の方法にも言及する。

これまでの事業内容とこれからの計画

このサブ・プロジェクトは、延暦13(794)年の平安京遷都以後、19世紀に至るまで長く日本の首都として、政治・経済・文化にとっての求心的機能を担った「京都」という歴史的都市の特質を、「宗教」という側面から、特に寺社という宗教施設とそこでの仏事・神事という宗教儀礼を題材に考察しようとするものである。とりわけ平安期以前の宗教儀礼のうちでも、平安仏教を構成した天台宗及び真言宗の法会や修法にスポットをあて、文献資料に窺われるその実態と変遷の過程を確認し、最終的には今日伝存する形態との異同を確認した上で、その意義について考察を加え、また同時に、今日の儀礼の中で原初的な要素を残存する部分を抽出し、他の文化的事象との企画検討を通じて、相互の関連性とその経緯を探り、トータルとしての文化の特質形成に果たした役割を究明することを目指している。

2002年から2003年にかけて、今後の課題研究の基礎史料とすべく、平安京遷都以後の8世紀末から10世紀を目処に、仏事法会及び神事に関する史料の蒐集・整理とデータベース化を進めて来た。とりわけ、京都に所在する代表的な古代の社寺である上賀茂・下賀茂両社と松尾・平野神社、東寺及び平安前期に成立した仁和寺等の御願寺を中心として、それぞれの特徴的な神事・仏事の成立過程・史的背景・展開(変容)等を追

究することを目的に作業を継続している。

2004年度は、2003年度まで継続してきた資料収集・整理及びデータベース化作業を継続して行うと共に、日本国外で当該研究課題に直接関連する研究を進めている日本史研究家2名を招聘し、その研究報告を含めた講演会を開催する予定である。

ケンブリッジ大学のバウリング教授は、東洋学研究所の教授であると共に、現在はセルウィンカレッジのマスターも兼任し、日本仏教史の研究を進めている。特に昨今は、史上初の試みとなる英文の日本仏教通史を執筆中であり、伝来期より平安仏教までの部分については、既に成稿されている。当該課題に直結する古代仏教の法会の問題について、講演を依頼する予定である。

また精華大学の劉曉峰副教授は、かつて日本の京都大学大学院で学び、その学位・学術博士(文学)を取得された。氏は中国古典文学に造詣が深く、その豊富な知識に基づき、中国の伝統的な祭祀や風習、年中行事等の日本への移入の特質について研究を進められた。当然その中には、日本に於ける神事や仏事法会の成立或いは移入に密接に関連するものがあり、これらの宗教行事についても氏は積極的に追究され、成果を世に問われている。

両博士の講演会にて披露されるであろう、外国人研究者による客観的分析に基づく日本古代の

神事・仏事法会についての考察の成果は、疑いなく本課題研究の進展に大きく寄与するものと確信される次第である。

さて、本サブ・プロジェクトに関して、プロジェクト代表者・本郷教授は、昨年度後期以来、現在も研究のため英国に滞在中である。そこでこれまでの事業成果に関しては、本郷教授の指導の下、当プロジェクトの基礎作業として行った上記の史料蒐集・整理を統括した毛利(元・本学文学研究科研究生)が、その視点と概要及び問題点に関し、昨年度のプロジェクト報告会(2004年1月28日)での報告内容を基にまとめることにする。

「伝統的宗教儀礼」への視点

われわれのプロジェクトのタイトルに見える「伝統的宗教儀礼」であるが、本来ならば、こうした「伝統」「宗教」「儀礼」といった概念じたいが最初に検討されなければならない。しかし「伝統」や「儀式」という事象の政治的機能に関する一般的规定は、だれもが認識しており新たに付け加える余地はないかの如くである。またそれについて宗教学や人類学などからの対象に即した研究も多い。歴史学の方法でこうしたことを新たに問題とする場合、そのような社会科学的一般記述、すなわち理論は、追究の視点を獲得するために有効である。それについて、歴史学研究における先学の成果も含み込んだところで、若干の整理をしておきたい。

まず「古代における儀礼・儀式」の特質とは何か、ということから導かれる視点である。これに関し、第一に考えておかなければならないのは「政治・宗教・儀式の不可分の一体性」ということである。古代は「まつりごと」という和語が、まさにそれとして生きていた時代である。かつて土田直鎮氏は、平安貴族の「政治」(政務)とは「儀式」のことであったと云われた。この言葉に込められた含蓄には深いものがあるが、以上のように、それぞれを分離して考えることには問題が多いとい云える。逆に、というか、だからこそ、比較的伝来している量の多い儀式に関する記録・作法書、宗教的な文献といった史料から、この時代の政治の特質を明らかにすることが可能となる。なおこの点は、古

代史研究ではこの15年ほどで急速に蓄積の進んだ部分である。第二に儀礼に於ける王権/天皇制の主体性という問題である。もちろん貴族や僧侶の役割を軽視することは出来ないのであるが、宗教的な儀礼の挙行によって目指されること、儀礼の主題みたいなものを考えるとすれば、「天皇」の存在を考慮しないわけにはいかない。諸宗教儀礼が王権や国家体制の守護に果たした意味を無視することはできない。しかしこう一般化することで、すべての問題にカタがつくかというのではなく、儀礼において「天皇」がどう捉えられてきたか、また王権の関与の度合いはどう変遷するか、を具体的に明らかにしていくことが大事である。

「王権と宗教」の関係については、本郷氏が年来のテーマとされてきたことでもあるが、このプロジェクトの課題とも関わってくるのは、宗教儀礼の挙行される場としての「平安京」という問題である。天皇の居住する空間である都城「平安京」において挙行される儀礼であることがどのように刻印されているかということは、例えば重要な儀礼は、興福寺や春日社など南都でも行われているわけであるから、それらとの際を明確にする形で具体的に解明されなければならない。9世紀初頭の弘仁・天長期に様々な宮中儀礼を整備した嵯峨天皇は、同時に「平安京」を「万代の宮」と(桓武に仮託して)位置付けた天皇でもある。

次に「伝統化の意味」ということである。われわれは「古代」という戦後の研究で主流となった時期区分の下で、課題を研究していくわけであるが、それ以後、中世以降の状況ということを常に考えておかなければならない。それは後世の史料も利用する必要上、当然のことであり、また今日「古代」という時代を考えること、このような時期区分を設定することにどういう意味があるのか、という研究そのものの意義とも関係してくる視点である。つまり「認識・回顧された古代」という問題意識である。宗教儀礼・儀式はいろいろな理由で退転してゆくものも多いが、逆に「賀茂祭(葵祭)」や「後七日後修法」、あるいは「大嘗祭」のように、長く継続したり、またある時期にいたって賦活されるといふ儀礼には、時代ごとに異なった独特の意味

づけがあるのである。「伝統化」という場合には「伝統として創造される」ということが含意されているべきで、このことは近年のさまざまな思想潮流から教えられることであるが、「古代」において成立し、今日まで継続している「宗教儀礼」を考える際、こうした「継続」そのもののなかに込められている意味を解説することは看過し得ない課題である。

以上のような視点を確認した上で、個々の儀礼の歴史的意義をどのように評価・記述してゆくか、ということがこのプロジェクトの研究上の課題なわけであるが、特に当プロジェクトでは出現・成立期の様相を解明することを主眼においている。そこで基礎作業として史料蒐集を行うことの必要が発生する。事実在即した具体性ということは、あらゆる歴史研究にとって必須の要件であるが、宗教儀礼を取り上げる場合は、その開催時期や場所／参加者／作法・調度などを詳細に詰めていく必要がある。この点について次項で述べたい。なお付言すると、こういうこともあって現在このプロジェクトで行っている史料蒐集作業に、儀礼の「伝統化」に関わる視点は十分組み込まれていない。どう研究に取り込んでいくか、ということは今後の課題である。

史料蒐集の対象

①対象とする時期 平安遷都以降、一条天皇の時代である寛和2(986)年までの時期で史料を集めている。これは『大日本史料 第一編』で下限を設定したものである。「古代」という認識は一般的にはかなり曖昧であり。また時期区分の下限を巡っては学界の中でも議論がある。時代の〈節目〉をどこに設定するかという問題や、宗教史の時期区分、特に「平安仏教の成立」の評価—奈良仏教との「断絶」の評価によっても、対象時期には問題が生じる。そこでここでは便宜を採った。

②対象とする空間的範囲 平安京周辺の寺社の史料を採集し、「京内」「山城国」には限定しない(○ 延暦寺 醍醐寺 松尾社 賀茂社 / × 興福寺 東大寺 春日社)。なおプロジェクトの名称は「寺院」としているが寺院に限定せず、「寺社」という範疇で考えている。これは神仏習合

の時代の宗教的状況を考慮するためである。また儀礼挙行の場としての「宮中」も、宗教儀礼の国家史的意義から採集の対象となることはいうまでもない。

③対象とする事項 [宗教性のある儀礼]という観点から、寺社法会を中心に、宮廷儀礼の史料も含め広く採集している。

④対象とする史料 これは史料の残存状況に制約されるところで、同時代史料が僅少かつ断片的記述にとどまるものが多い以上、対象とする時代の総ての文献から採集している。具体的には、貴族の日記である古記録、『日本後紀』以降の国史や『類聚国史』『日本紀略』、儀式書・『政事要略』『延喜式』『類聚三代格』などの法制・儀式史料、寺社文書を中心とした文書史料、『扶桑略記』や『元亨釈書』など仏教史関連史料、文芸史料(説話集・漢詩集・歌集・物語)などである。

ところで、対象史料は今のところ文献史料に限っていて、それ以外のものをどう扱うかという課題が残る。絵巻物のような絵画資料は多くが院政期以降に出現するが、こうした史料から得られる知見は、儀礼の場や作法の具体的解明に資するところが小さくない。近代には写真などの映像資料も登場する。近代以降、学問的調査や観光の対象となる宗教儀礼(祭礼)は、映像によって記録されるようになったからである。建造物から調度品まで、現に残されているモノから解明されることも多い。これらは先に今後の課題として指摘した「伝統化」の様相を明らかにするためにも必要な資料であろう。こうしたいわば「ビジュアル」な史・資料の蒐集と活用については、当プロジェクトでも注目していかなければならないと考えていることを付記しておきたい。

史料データベースの構築とその活用

以上、現在まで継続している史料蒐集の状況について述べた。これらは最終的には、電子化し、データベースソフトで扱えるよう加工する予定である。最後に刊行史料などからのカード作成とその入力という、これまでに行ってきた実際の作業から生じた問題点などに触れておきたい。

まず史料を採録する基準に関わる課題。史料

カードでの採集項目は、予め確定していても、複数の人数で行う実作業の段階ではあまり役に立たなかった。当初は漫然と採集をしていたが、やがて要不要の判断・取捨選択には、ある程度の見識が必要でことに気づかされる。最初の項目で述べたような「視点」を確認することがそこで要請された。また作業を通して残されてゆく史料についても分類という作業が難しい。これは採集項目の有効性・検索の利便性というデータベースの活用に関わってくるところある。例えば時期・開催地・儀礼の内容・史料の主題などについても、個々の史料に照らせば、一つの分類で括れないような多様な読解を許すもの、一つの項目に収めるには無限定すぎるものなど様々である。データで括るのが穏当なのであろうが、当然ながら特定時日に掛けやすい史料とそうでないもの(法令・作法のマニュアルなど)が存在する。また歴史研究上いつでも問題になってくるところで、テキストの「信頼性」についても配慮が必要である。

さて、こうして作成されてくるデータベースであるが、いわゆる「史料集」としてどう独自性を出すか、ということは常に考えさせられる。歴史的に見ると古代以来、何らかの目的で利用するために、既存の文書・文献を、特定の基準で採集・分類した「類聚」もの(『類聚国史』『類聚三代格』など)は数々編纂されているし、その元となった中国の「類書」(『芸文類聚』など)も早期に輸入されている。こうした思考は通時代的なもので、分類の方法自体を歴史的検討の俎上に載せることが必要なのであるが、そのように見た場合、ここで作成を目指しているデータベースも、分類のあり方に見識を問われるわけである。また『大日本史料』『平安遺文』といった史料集、あるいは数々の古記録のように、古代史の基本的史料は既にデータベースとして公開されているものも多い。採集対象史料がこれらと重なる以上、もちろん今作業を進めているものは特定の目的に資するため特定の視点に即して構築されるデータベースなのではあるが、新たに作成することによって如何ほどの利便性が得られるのかということも常に問われている。これらの点は明確にしておく必要がある。

そもそも、今日さまざまに作成される史料データベースについて、その研究方法論的な意味が再確認されるべき時期にきているのではなからうか。史料データベースの盛行は歴史学の研究にどのような結果を招来するものであろうか。その利用は古代史研究の場合、基本的に「用例しらべ」が多い。それは頻度や傾向の分析によって、何らかの結論を得る、というものであろう。もちろん史料の見落としを確認するとか、ペーパー作成の際に史料入力の手間を省くとかいったベタな？利用法もある。一方で、データベース的発想からは切り捨てられる部分も確実に存在するであろう。データベースがもたらすのは機械化された「有職故実学」、すなわち考証的歴史研究への回帰であるように思われる。われわれのプロジェクトは、宗教儀礼の細部に光を当て、具体的な儀礼の復元から新たな歴史像を築きあげることが目的であるが、それが細部へのある種の耽溺に陥らないかどうか。例えば「儀式」をめぐる倫理観ないし価値意識に光を当てられるのか。こうした点が課題となってくることも確かである。

以上、プロジェクトリーダーが海外留学中なので、その間、毛利が担当している関連史料蒐集につき、作業の過程で生じた問題点を整理するとともに、研究上の活用方法についてまとめた。今後、当プロジェクトでは蒐集した史料を活用し、特定寺社・特定儀礼に照準を絞って検討を続けていく予定である。またこれら以外にも、中国や西洋との比較といった観点で課題に関わる研究を進めていく予定である。